慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ヒックス 景気循環論 |
| Sub Title | J.R. Hicks; A contribution to the theory of trade cycle, Oxford, 1950 |
| Author | 福岡, 正夫 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1951 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.1 (1951. 1) ,p.67- 73 |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19510101-0067 |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510101-0067 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タムソン博士がこの問題はアメリカの重大關心事だと言つたが、調査團も「アメリカ政策の社會的目標は、他國民の生活水準または政治的獨立を脅かすことなく日本人の福祉を增進せしめることである。……戰後の日本の人口狀態は、日本人の出産率が、たとえ全國民についてゞなくても、少くとも廣い範圍に亘つて、甚だ(drastically)減少せしめられない限り、この明白な占領目的を破綻せしめる。斯くて小家族主義の普及は占領目的の一つとして、政治的民主化、社會的再建、及び自立經濟と當然肩を竝べねばならぬ」と言う。では何か積極的態度が見えるかといえば、否である。マッカーサー元帥自身、タムソン博士が滯在中表明した人口制限論に對して次の如く聲明した。「一切の誤解を防ぎ一切の謬見を一掃するため、最高司令官は、彼が日本人口調節問題の何等の研究または考慮にも從事していないということが了解されんことを望む。斯かる事柄は占領の所定範圍ではなく、從つて決定は全く日本人自身の手に在る。日本に於ける人口制限について最近發表されたタムソン博士其他の聲明は全く個人的見解で、占領軍の正式の考慮または見解の上に立つたものではない」と。この聲明は在京連合カトリック婦人クラブが博士らの意見に對して放つた抗議に答えたもので、調査團の上記の文章と比較して異樣の感に打たれざるを得ない。併しアメリカに宗教的立場からの不合理な反對論が横行し、また日本人の間に小家族主義の合理性に對する疑惑が一掃されない限り、斯かる消極的な態度も政治的見地からは止むを得ないであろう。我々は國内の一切の問題について外國の指令を敢えて欲するものではない。併し好意的勸告は與えて然るべく、容れて然るべきである。この意味から、特にこの問題だけで腫物扱いにされているのは不思議と言わねばならぬが、同時に、このことからも問題の深刻さと複雜さを窺うことができるのである。

（一九五〇、一一、二九）

## 評書

# ヒックス『景氣循環論』

J. R. Hicks; A Cotribution to the Theory of Trade Cycle, Oxford, 1950.

福岡正夫

書評ということについては小泉信三先生の『讀書論』に次の敍述がある。

「新刊紹介としては、先づ著者が何をその本で言つているかを讀者に知らせることが第一であるのに、その内容には殆ど觸れずに、それに對する評者の主觀的な是非または好惡のみを述べただけに終るものがまだまだ少なくない。假りに筋を知らない芝居の劇評を讀んで、たゞ評者の俳優に對する個人的好惡だけを聽かされたとしたら、どんなものかと想像すれば、書評家の任務が奈邊に存するかも察することが出來るであろう」。

わたくしもまた右の言に從つて以下ヒックスの新著の荒筋をそのまゝ傳えることから始めたいが、とはいえ既に本文についても數學附錄についても遙早く詳細且つ正確な紹介があり、(註1)また近くその譯書の公刊も豫定されている本書については、その内容の紹介も最小限度の要約を以て足りるであろう。

※　※　※

景氣循環論に於けるヒックスの立場は、之を一言を以て斷ずるならば、いわゆる「制約された發散」(リミテッド・ディヴァル・ヒュリー)乃至はサムエルソンの呼ぶ「玉突合」(ビリヤード・ディヴァル・ヒュリー)理論の構想をその中核となすものということが出來るであろう。以下このことを順次に說明してゆこう。

まづヒックスが一にケインズにその乘數論を負い、二にフリッシュにその加速度原理を負つて、それらの相互作用を景氣循環論の一環たらしめんとする限りに於いては、それは一應ハンセン――サムエルソンの周知の成果を攝取するものと考えられよう。まことに彼に依れば「需要の理論と供給の理論とが價値論の二面であるのとまさに同じく、乘數の理論と加速度の理論とは景氣循環論の二面をなす」。(註3)しかしながら、かゝる攝取は彼に於いてはあくまで一つの豫備的作業にとゞまるものであり、決してそれ以上を意味するものではない。彼をして更にその先に歩を進ましめた第三の先驅(プロヴェニタ)は新著『動態經濟學へ』(註4)に集約されたハロッドである。ハロッドから彼が收獲し得た思想の一つはいわゆる經濟的成長という考え方、すなわち景氣循環を貫いて底流する經濟運行の基軸が決して定常水準のそれではなくむしろ擴張經濟のそれであるという認識であり、かくして乘數――加速度のメカニズムはヒックスのこの書にあつては成

長しつゝある擴張經濟という舞台裝置の中に嵌め込まれるのである。しかし彼がハロッドに負ふところはなおもこの點のみにはとゞまらない。より決定的な點は、「制約された發散」という彼の理論のケルンそのものが既にその構想の胚種をハロッドに負うているという事實である。むしろ極言するならばヒックスのこの論議は、その敍述の晦渋さの故にやゝもすれば從來ひとをしてその counteravailing merits にも目をつむらしめがちであつたハロッドのすぐれた着想を、ヒックス一流の明晰さを以て朦朧の中から切り出し、魅惑的に彫琢した成果であるとさえいうことが出來るのである。その意味に於いては、恰も往時ケインズの『一般理論』に對して施されたていの清掃作業が今こゝでもまたパラレルにいとなまれているのだという一洙の感さえ讀者の心を過ぎるかも知れない。しかしこの點をあまりに強調し過ぎるのは恐らく本書への正しい評價ではないであろう。けだし本書がその想源の如何に多くをハロッドに負うとはいえ、思想の卓越は直ちに分析裝置の巧妙を意味するものではなく、しかも讀者が本書に期待する興味の一焦點はまたこの後者にこそ存するであろうからである。このように眺められたときまさに本書は如上の諸系譜を打つて一丸とするヒックスの構成力の卓越さを縱横に發揮した別格な一寄與たるを失わぬのである。

※　※　※

ヒックスの理論の内容を述べるためには、それに先立つて、從來の景氣理論の基礎に對する彼の批判を記しておくのが便利であろう。その一つは、これまで例えばカレツキに見られた如き、體系の係數（投資係數）がまさしく單弦弧動を與えるような値をとるという立場に對する批判である。經濟の自由な運行が減衰もしなければ發散もしない際どい分界線を辿るような値を、現實に過去二世紀を通じて、體系の係數がとりつゞけたと考えることは、ヒックスに依ればあまりにも脆弱な假定である。では次にフリッシュのように、體系の係數そのものは減衰振動を惹起すが外的攪亂の絶えざる發生によつて循環運動が持續されると考える立場はどうであろうか。かゝる Erratic Shocks 理論に對してヒックスは次のような批判を與えている。およそこの立場は經濟の動きをシステマティックなパートとランダムなパートに分解して考えるが、いま係數が僅かしか減衰力をもたぬ値をとると考えることは、システマティックなパートから循環を説明し得る可能性を與えるかに見えながら、かゝる値を係數に要求することは前の立場に對すると同樣な批判を免れ得ず、一方係數が強い減衰力を發揮する値をとると考えれば、循環の説明はすべてランダムなパートに課せられて定型的な理論は蒸發し去つてしまうのである。

かくして體系の係數の値が同じ振幅の振動力をも減衰力をも與えるものでないとすれば、殘された途は當然にそれが發散力を與える値をとると假定することであろう。しかし、こゝに至つてひとは目を擦るに至るかも知れない。そのような場合には、經濟は無限に擴大（もしくは收縮）を續け、究極に於いては完全なカオスの中に爆發してしまうことになるのではないか。かゝる心配に答えてヒックスはいう。なるほど經濟の動きが全く「自由」であつて何らの障碍をも蒙らないのであれば、そういうことが起るであろう。しかし、それ自體發散的な動きに從うにせよ、もしそれが何處かでそれ以上には進み得ない何らかの「制約」に突き當るとすればどうであろうか。そのときには、恰も玉突の球が台の縁に突き當つて撥ねかえるように體系の動きはその障壁に突き當つて反對方向に轉ずるのではあるまいか。ヒックスが確信を以てとりあげるのはまさにこの途である。

『私は景氣循環という課題を研究してゆくにつれて、この假説が眞に事實に適合するものであることをますゝ確信するに至つたのである。』（註5）

※　※　※

こゝからヒックスの課題が――すなわちハロッドによつて示唆された構想を如何にして納得的な理論に組立てゝゆくかという課題が始まる。この點は本書の心臓部をなすものと思われるから、その梗概を最もコムパクトな形で要約しておくことにしよう。

いま一定率で成長する自發的投資が前提されると、それに對應して同じ成長率で增大する產出物の均衡經路が一義的に決定される。ところで、ある時點までこの均衡經路を進んできた經濟が何らかの原因で（ヒックスはその例として技術的發明による短命な自發的投資をあげている）均衡經路から僅か上方に離脱したとしよう。發散型係數という既述の假定によつて、體系の運動はますゝ均衡經路から乖離し、遂に完全雇傭經路という制約に突き當る。いまや產出物は、同じく自發的投資の成長率をもつこの完全雇傭經路の成長率、從つてまた均衡經路の成長率以上の速度で擴張することは出來ず、かくして產出物の成長率はふたたび弛緩して以前の成長率に戻るから、それは產出物をして完全雇傭經路を歩ましめるだけの誘發的投資を生むことが出來なくなり、體系は早晩ふたたび以前の均衡經路を目指して下降せねばならぬ。上方轉換點についての以上の説明までが彼の積極的理論の 1/2 である。次いで後半は下方轉換點までの説明に充てられる。さてひとたび下降に向つた運動は一意相對的下降の途を辿るが、そのことはやがて絶對的な下降に轉じ、いまやマイナスの誘發的投資を生ぜしむべき筈となる。しかし、こゝでふたたびヒックスの特徴的な説明が登場する。お

よそひとたび建設された固定資本は經濟の下降運動に直面しても破壞されるわけにはゆかないから、固定資本に關するかぎり加速度の原理は上昇運動の場合と全く非對稱的な作用をもたねばならぬ。それはむしろ減價鎖却の停止によるそれらの固定資本の自然消滅という形でより緩慢に現われざるを得ない。すなわち產出物が絕對的に減少するような下降過程に於いては、純誘發投資とはもはや產出量の變化の函數ではなく單に固定資本の減價に等しいマイナスの量となる。このことは見方によつては、自發的投資が固定資本の減價に相當する一定量だけ下降した事態と等價に考えることも出來るであろう。かくして、かかる下降過程の續くかぎり、われわれは始めに與えられた自發的投資の高さを一定のコンスタントだけ下方に平行移動させて考えることが出來る。そうすれば當然に、それに對應する均衡經路そのものも以前のそれよりはより低位のものとなるであろう。ところでここで考うべきは、いま述べたように、かかる下降過程では固定資本について本來の加速度は作用せず乘數のみが作用するということである。そうして乘數機構が元來體系の收斂作用に立脚するものであることに着目すれば、この際の體系の運動が無限小への發散ではなく、低位均衡經路への收斂であることは理解に難からぬところである。確かにこの場合に運轉資本や流動資本をも考慮に入れねばならぬであろうが、これらに



働く加速度は恐らく極めて微弱であり、上述の傾向を決して覆えすほどのものではないであろう。さてこのようにして、ひとたび體系が低位均衡經路に收斂すると、それはその經路に沿つてふたたび成長する。このことは產出物の成長がやがて開始されることを意味し、しかもかかる成長が始まるならば、そのときの均衡經路が低位のそれではなくしてふたたび以前のそれであることは明らかである。かくして體系の運動は低位均衡經路を離れて以前の均衡經路に向い、景氣の回復が始まることとなる。且つこの運動が以前の均衡經路に達したとき、それはその經路に沿う場合よりもより大なる速度で擴張しているから、必ずその經路を overshoot し、さきの如く完全雇傭經路に向つて突き進むのである。體系の運動はかくして完全に一循する。

※　※　※

なお細部の彫琢についてはこの書物の飜讀に俟たねばならないが、ヒックスの景氣循環論の骨子は略々以上の如くである。これを要するに、彼の理論は資源の完全雇傭經路という制約と加速度原理の非對稱性に基く低位均衡經路という制約と、上下二つの制約に交々衝突し收斂する產出物の運動をその支柱としているように思われる。いままでの說明で分るように、彼の論はあくまで乘數――加速度機構に基く產出物のリアルな運動に中心をおいてをり、貨幣的な要因についてはいわゆる「流動性

蜘蛛の巢理論」に關する分析が附隨的に最後の二章に收められているに過ぎない。總じて本文の敍述は極めて透明であり、それが大なる說得力と渾然たる綜合力とを以て貫かれていることは『價値と資本』に於けるヒックスさながらである。しかしながら、こと分析の用具に關するかぎり、本書のヒックスは前著のヒックスと殆ど全く異つている。

かつて『價値と資本』第二版の末尾にヒックスは次のように書いた。

「經濟學上未だ解決されていない最大の問題の一つは、景氣循環が定差方程式によつて表わされるようなメカニカルな周期性によつて說明された方がよいか、それともまたケインズ型の一時的均衡理論によつて說明された方が究極に於いてより有力であるか、という問題である。その問題に對する答えが疑いもなくサムエルソンと私との間に橫たわる理論の肆點をも附隨的に解決してくれるであろう。」(註6)

この二つの立場のうち彼自らが前書に於いて「解決」した立場は明らかに經濟變動を timeless な調整を前提とする一時的均衡の軌跡として把握する後者の立場であり、その理由として彼の述べたところは、自らの立場こそ主體的均衡の理論と直結して經濟單位の極大化行爲に附隨する豫想その他の動機の包攝をも許すものである、ということであつた。しかるに今般の新著に於いては、彼はかかる主體的含蓄をもつ "my dynamics" から自らを殆ど全く解放し、あげて timeless でない立場、すなわち變數の間のラッグを中心とする定差方程式分析の立場に移行しているのである。彼自らによつて相對持すると述べられたこれら二つの立場の中一方から他方へとこのように移行することは、彼に於いて一體如何なることを意味しているのであろうか。われわれは、本書と前書との間に橫たわるこの沈默の意味を知りたく思うとともに、改めて彼が現在のパースペクティヴに立ちつつかの限界革命に如何なる意義を認めるのかをも、この上なく知りたいと思うのである。「果物ナイフは焙肉を切るには適していない」。價値論には價値論にふさわしい景氣循環論にはふさわしいナイフとフォークを手にとることこそ肝要である、これがヒックスの解答でもあろうか。

個々のテクニカルな論點は別の機會に讓るとして、いま一つわたくしがここに述べておきたいのは次のことがらである。所得という一つの變數の運動形を一、二の體系の係數から明らかならしめようという極めて單純化された動學分析が、ここ十數年の經濟理論の流れの中にまことに大なる比重を以て立現われるに至つたことは、いわゆる所得分析の流行に伴う當然の一歸結であり、われわれはかかる型の分析が背後に有し來つた政策

的傾向の萌芽を高く評價するとともに、またその担荷の一つをなした周知のサムエルソンの貢献が當時の學界に齎したあの新鮮な氣を永く心に銘記してしかるべきであろう。しかしながら、この傾向の極まるところ遂には現代のレルヤンたちがヒックスまでをも進んでこの分野に乗出さしめるに至つて、漸く一部の學者たちが、かゝる型の分析の構型の單純さ、變數の少なさを歎じ始めたことも亦當然の一事であるであろう。天文學的と呼ばれるほどの變數をもつ一般均衡分析から新しい動學分析への移行が行われるに際しては、新用具の意味を眼く網得せしめるため極端に單純な模型の構成が便利であつたこと、且つケインズ流の所得理論がそれに時宜を得たこと上なき内容を與えたこと、これらのことは誰しも肯定し得ることがらである。しかしながら、ひとたび動學分析の意味が大綱ならびに説明せられた以上、進んでその廣汎な有用性を示すためには、ひとは先輩諸者の用いた貧純模型の安樂さに滿足することなく、ふたたびそれが當面する現實界に於いて重要とおぼしき變數をたぐり入れ、それらの動學的な相互依存關係の探究を自らの課題とせねばならないであろう。例えばメッツラーは近時の論文に於いてレオンチェフ體系の動學化といふことに將來の動學分析の望みを托している。(註8)勿論かくいうことは、決してただ形式的にのみ變數を倍加して徒らに體系の複雜化を圖るといふ、



あの似て非なる一般化への安價な志向を意味しているのではない。斷じてそうではなくむしろ現實の事態の止むに止まれぬ要請が自ら模型の擴張を内から必然ならしめるという意味である。ヒックスは本書のうち完全雇傭という上方限界の性質を論ずるにあたつて、場合によつてはひとつの上方限界、上方限界よりも例えば消費財のそれと投資財のそれというふうにいくつかの上方限界を分つことの必要を述べているが、このような方向への展開をわたくしは高く評價するものである。ヒックスが同じ箇所で、正常時の事例ではないが故に本書では省くとして後日ら(註9)の二つの論文に托している戰後經濟の模型の如きに於いては、例えば原料の上方限界とか資金の上方限界とかいうような要因が夫々技術上の補完性や制度上の伸縮性に關聯して極めて重要な發言權を有すべきであろう。これらのことを考え合わせるならば、われわれが本書から攝取し得るかぎりのことをわれわれ自身の大なる努力が要求されねばならぬのである。

自身の現實の理解に役立たせるためには、まだまだわれわれの歴史的

(註1) 古谷弘「ヒックスの景氣循環論」(經濟學第二號三四——五〇頁)、同「ヒックス景氣循環論の數學的背景」(經濟學論集第十九卷第五號一——一八頁)。

(註2) P. A. Samuelson, Foundations of Econmic Analysis, 1947, p. 340.

(註3) J. R. Hicks, A Contribution, p. 38.

(註4) R. F. Harrod, Towards a Dynamic Economics, 1948, Chapter III. ditto, Essay in Dynamic Theory, Economic Journal, 1939.

(註5) Hicks, op. cit, p. 92.

(註6) Hicks, Value aud Capital, 2nd, ed; 1947, p. 337.

(註7) L. A. Metzler, Three Lags in the Circular Flow of Income, in Income, Employment and Public Policy, Essays in Honor of Alvin H. Hansen, 1948, pp 14—15.

(註8) J. R. Hicks, World Recovery after the War, Economic Journal, 1947. ditto, Full Employment in a Period of Reconstruction, Nationaloknomisk Tidsskrift, 1947.

(一九五〇・一一・四)



センタクK『景氣循環論』